OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂講座講演要旨
Author(s)	脇田, 修; 今井, 修平; 信多, 純一 他
Citation	懐徳. 1982, 51, p. 28-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90600
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈懐徳堂講座講演要旨〉

大阪の歴史と人物――昭和57年春季

高山右近の生きた時代

脇田　修

高山右近は、戦国時代の武将であり、ジェストの洗礼名をもつキリシタン大名として知られている。また利休の弟子として茶を嗜んだことも有名である。この右近は、北摂・現豊能町高山の出身であり、父飛騨守に従って、大和沢城に移り、そこで父とともにキリスト教に改宗した。その後、高槻城主として、織田信長に仕え、豊臣秀吉によって、明石城主に移されるが、天正十五年（一五八七）バテレン追放令のさい、改易されて浪人した。やがて前田利家に召抱られ徳川の世を迎えるが、慶長十九年（一六一四）徳川幕府の禁教政策の実施とともに国外追放にあい、フィリピンのマニラに到着、直後に客死した。彼の波瀾に富んだ生涯は、大阪の戦国武将というだけでなく、日本史のなかで光彩をはなっている。ここでは高山右近の人物像―信仰に厚く、教養豊かでどちらかといえば清潔すぎると評された性格などを明らかにしながら、それにもかかわらず戦国の苛酷な世のなかで、どのように生き抜いたかを述べたいと思う。

淀屋辰五郎と町人社会

今井修平

淀屋辰五郎は、その著名さにおいて近世大坂の町人を代表する人物である。ところが、その実際の経済活動や、五代目辰五郎が欠所（財産没収のうえ追放）を命じられた経緯など謎の部分が多い。

淀屋の家は大坂の陣で徳川方の作事をおこなった功績により、元和元年（一六一五）以後、大坂の復興を命じられた典型的な開発町人（初期特権町人）である。初代常安は中之島の開発によって、常安橋、常安町にその名をとどめ、二代、个庵（言当）は諸大名の蔵米売捌に従事して堂嶋米市の起源となったといわれ、淀屋橋の近くに一万坪の屋敷地、四八の蔵をもつ巨大商人となったとされている。そして宝永二年（一七〇五）五代目辰五郎が町人に過ぎた驕奢のため幕府から処罰されて没落したことが世間の耳目をあつめ、芝居の題材とまでなったのである。しかし、その内容はきわめて伝説的で誇張が多く、真相からは程遠いものとなっている。

歴史的事実として、淀屋の発展と没落の背景には、近世封建社会における大坂の都市的役割と、元禄時代を画期とする全国経済の転換、および大坂町人社会における新旧勢力の交替があると考えざるを得ない。ここでは淀屋の経済活動の実態と欠所の真相をさぐることを通じて、その背景となるこれらの諸点を

考察してみたい。

近松と義太夫

信多純一

近松像の有名なものに現在二つがある。一つは公卿侍としての正装に身を固めたいかめしい容貌の肖像であり、今一つは市井の人として羽織袴姿で正座する柔和な表情のそれである。このきびしさとおだやかさの二面は一体何を物語っているのであろうか。或いは絵師のさかしらにすぎないのであろうか。

一方、見台を前に浄瑠璃を語りつつある姿を描いた義太夫のそれは、いささか容貌魁偉といってよいであろう、強靱さが強い性格が画面を通して激しく迫ってくる図である。彼は天王寺村の小百姓の出であり、辛苦の末一流を編み出し、太夫の座を摑み取った人物であった。

この二人の出合が、大坂における出合こそが、現在に至るも伝承され語り継がれ、その芸術性のみならず日本人の思想的なものとして心の底流に脈打つ一大芸能を生み、またシェークスピアに比定される戯曲の傑作を生ましめるに至る。この二偉人の歩みとその出合の経過について、二人のからみの意味するところについて時間の許す限りみてみたい。その結果は、彼等のそれぞれの肖像が、やはり真をとらえていたものであることを示すであろう。

多田源氏と石川源氏

黒田俊雄

中世の武士といえば東国の武士が知られ、その棟梁としては清和源氏が有名であるが、清和源氏ははじめ、いまの大阪府下の摂津の多田、ついで河内の石川方面を本拠としていた。源氏はここを本拠として、どのような生活をくりひろげていたか。ついで、嫡流が京都さらに鎌倉へ居を移したのち、多田や石川ではどのような武士団の生活があったか——これらを通じて、古来伝説的に美化されてきた中世の武士の生活の姿を、考え直してみたい。

西村天囚と懐徳堂

梅溪昇

享保九年（一七二四）に大阪町人五同志等が出資し、儒者中井甃庵が中心となって現在の今橋四丁目に創立された学塾が懐徳堂である。同十一年に幕府の公認を受けて半官半民の学塾となり、大阪学問所または単に学校とも称した。この学校は学者の養成よりも町人の教育に重きをおき、校風が自由で、大阪人の気分に合い校運追々盛んとなり、中井竹山・履軒のころには黄金時代を現出し、当時唯一の官立、江戸の昌平校を遙かに凌

ぐほどで、商都大阪の誇りでもあった。この名校は一四〇余年間続いたが、明治維新の変革に伴い明治二年（一八六九）廃校となった。

やがて明治の末年から大正の初めにかけて、かつての懐徳堂が顧みられ、その研究が勃興し、学校そのものも再建（大正五年）されるに至った。この懐徳堂の研究および再建に最も尽力した人物が西村天囚（慶応元～大正十三、一八六五～一九二四）である。

鹿児島市を去る六二海里の洋上に浮ぶ種子島に生れた天囚が、どのような事情で大阪の懐徳堂に強い関心を抱き、その再建に情熱を傾けたか。また再建後の懐徳堂の将来に何を期待していたか。総じて、天囚の懐徳堂復興の事業は、大阪の文化史上どのような歴史的意義をもつか。これらについて言及してみたい。

中国文化と日本――昭和57年秋季

『忠臣蔵』のシノロジー

日原利国

吉良邸に討入りした赤穂浪士は、物置小屋にかくれていた義央を見つけて連れ出し、大石内蔵助が義央の額と背中の傷を確かめて、間重治郎が首をはね、一同、泉岳寺にむかう。義央を足げにしたり、鞭うったりなぞしない。残虐にあつかっては『忠臣蔵』の美学がぶちこわしになり、義士のイメージがそこなわれよう。しかし、中国のばあいはどうだろうか。

「おそかりし由良之助」のセリフで知られる「判官切腹」は元禄十四年三月、四十七士の討入りは翌年十二月のこと。この一年十カ月の間に、もし義央が病気でもして死んでしまったら、どうなるんだろう。仇討ちをしようにもできず、武士道はじたんだ踏んでくやしがるだろう。が、死はすべてを解消し、いっさいを水に流す。しかし、これは日本のこと、中国人は必ずしもそうではない。

中国で史上いちばん有名なのは伍子胥の仇討ち――父を楚王に殺された伍子胥は呉にのがれ、やがて呉の軍勢をひきいて楚に攻め入った。このとき楚王はすでに他界して十年。伍子胥は墓をあばいて屍を引き出し、三百鞭うったという。死者への仮借なき報復、あまりに残虐で顔をそむけたい。

ところが伍子胥は、苦心のはてに復讐した「烈丈夫」と称賛される。それもそのはず、中国では、君父の仇はともに天を戴かず、経書も「百代かかっても必ず討つべき」を義務づけているほどなので。

孟子の遊説

橋本高勝

孟子その人についての基本的な資料はもちろん『孟子』であ

る。『孟子』には孟子とかれの弟子や諸侯との問答が多く記録されている。それで、諸侯との問答から、孟子が梁・斉・魯・滕・薛などの諸国を遍歴し、諸侯に自分の理想とするところを説いたことがわかり、諸侯の生存年代から、孟子の活躍した時代が西暦紀元前の五世紀から三世紀までのいわゆる戦国時代、その中期の十数年間であり、『孟子』とは孟子の遊説のタビの記録ということがわかる。しかし、諸国をどのような経路で遍歴したか、確かなことはわからない。また、その遊説は早くとも孟子五十歳以後であるらしいが、遊説の以前・以後については『孟子』に全く記録がない。孟子伝記の最古の資料として、『史記』の「孟子荀卿列伝」があり、次に後漢の趙岐の「孟子題辞」がある。が、いずれも簡略で、遊説期を除いて、孟子の生涯の大部分は不明のままである。

そこで、注目されるのは、孟子が孔子に私淑し学んでその現実主義的な姿勢を選びとった結果として孔子と同様、孟子のかかえ込むことになった矛盾、すなわち遊説のためには父母の国を去らねばならず、よって父母を放置することになる不孝と、遊説において説くところとの矛盾である。神話や宗教のごとく世俗を越えたところに立つならば回避できたであろうこの矛盾を、孟子は伝説の聖王舜に仮託し、自らの憂いを解く道への情念に代えているかに見える。この角度から孟子の言動について少しく考えてみたい。

ことばの来往

芝田稔

〝日中同文〟という角度から漢語の日中交流の場に表れた言語現象につき、その一端を述べてみようと思う。

漢字で表記された漢語、つまり中国伝来の熟語が日本語彙として使用されるようになった時から、漢語は日本語の語彙を豊かにし、かつその精密度を高める上で大いに役立った。と同時に人びとは必要に応じて漢字を駆使して新しい熟語を創造する能力をも身につけた。おかげさまで、こうした先人の言語経験は、幕末・明治初期における西欧文明の受容に際し、大いにその力量を発揮した。というのは、最初にぶつかった言語の問題を、わが国では漢字・漢語によって適切に処理することができたからである。

一方中国では、清末アヘン戦争（一八三九―四二）以来、列強の侵略をうけてきたが、国力の富強を目指して〝西学為用〟とする洋務運動を起し、西欧文明を吸収するため多くの翻訳書を公にした。中でも厳復（一八五三―一九二一）が翻訳した『天演論』等は、当時の青少年読者に大きな感動を与え、中国近代化への道を開く役割を果した。だが惜しいかな、彼が創造した訳語は、学術用語として中国の学術界に定着するに至らず、それに代って日本の漢字訳語が梁啓超（一八七三―一九二九）や清末以来の留日学生によって中国に普及され、やがて定着する

ことになった。

漢字の構成

吉田　恵

中国文字つまり漢字のばあい、一つの文字を作ることは、一般に、〈形・音・義〉の一つの結合体を構成することにほかならない。後漢の王朝の人、許慎の著作『説文解字』、つづめては『説文』と呼ばれるものは、中国における、この意味の文字づくりの研究の、はじめての、まとまった成果であった。

『説文』は、しばしば指摘されるとおり、総論に当たる部分のなかで、文字づくりの方法を六つの種類に分け、まとめて〈六書〉と呼ぶとともに、それぞれ〈指事・象形・形声・会意・転注・仮借〉の名と簡単な定義とを与えている。ところが、じつは、それの本論の部分では、その方法が〈六書〉よりもはるかに詳しい分類のもとに見出だされる。たとえば、そこには、〈象形〉一つにさえ、明らかに、少なくとも四つの下位区分があるのである。

清の王朝のときには、なんにんかの人が、それぞれに、文字づくりの方法の、〈六書〉よりも詳しい分類を発表した。が、それらは、いずれも、『説文』本論のそれとは、多分に食い違っている。

許慎の語るところに虚心に耳を傾けつつ、古き世の文字どもの秘めている、豊かな、いきいきとした真実を、いささかなりとも伝えたい。それは、日本語の中の漢字を考えることにとっての、なんらかの手掛かりにもなろう。

江南の旅——一九八二年夏——

阿頼耶　順宏

関西中国哲学研究者友好訪中団に同行して、八月二十六日から九月五日まで、上海、杭州、紹興、南京、揚州、蘇州を回って、見たこと、聞いたことの報告。

日中国交正常化十周年の年に、教科書検定問題を契機として、日中関係のあり方が問い直されている。八月一日付の『人民日報』では、「教科書検定の『一貫した』方針が、『日中共同声明と日中平和友好条約の精神を正しく反映する』ものであるなら、どうして日本の中国侵略の歴史を美化するというようなことがおきるのか。……過失をおおいかくし、利口ぶるのはやめてやはり正直にした方がいい」と述べている。

こうした時期に中国を訪問し、あらゆる機会をとらえて、中国の人びとと率直に話し合い、これからの両国の関係のあるべき姿を考えてみたい。

現代化をめざす中国にも、さまざまな問題が起こっているようである。中国の当代文学作品にみられるこうした問題についても、実際の見聞とあわせて、考察を進めてみたいと思う。